

昨年、なんの拍子か、上田秋成の『雨月物語』を現代語訳することになった。いわずと知れた江戸時代の怪異譚を集めた読本である。溝口健二監督による映画の影響もあり、おどろおどろしいイメージがある。

全九話を取め、その第一話は、日本三大怨霊の一人、崇徳院と西行法師の掛け合いである。『菊花の約』、『夢応の鯉魚』、『青頭巾』などはよく知られた話だが、最終話の『貧福論』まできちんと読んでいる人は少ないのではないか。

陸奥の国蒲生氏郷の家に、岡左内という武士があった。貯蓄を趣味にしている。私欲ではなく、金は武器より有用だから集めている。武士として、世を治めるのに有用なものを集めるのは当然である、という理屈なのだが、なかなか世の人の理解はえられない。そんな左内のもとへある夜、小さなお爺さんの姿をした、金の精が現れた。

金の精としても、金持ちはごうつくばりのごろつきばかり、無慈悲、無惨な者ばかりであると言われるのはつらい、という。ついでには、金の精が日々思うところの、金の徳というものを解き明かしたい、とのことである。『史記』や『論語』、『中庸』などを縦横に引き、金の



絵・江口修平

貧福論

円城 塔

性質というものをとつとつと説く。左内も日頃思うところがあつたから、こちらも胸の内を打ち明けて、金の素晴らしさについて夜明けまで語り明かした。結論としては、経済に長けた徳川家が世を牛耳ることになるだろう、として終わる。

怪異ではあるが、特に怖い要素はない。無理矢理に怖いところを探せば、何かに憑かれたように延々と語り続ける二人の口調だが、それはいわゆる怪談の怖さとは異なる。

怨霊にはじまり、経済話で終わるといふのはなかなか意表をついた構成であり、この点について深く掘り下げた論考はないのではないかと思う。

上田秋成は、商家に育つた。のちに破産し、医者に転ずる。晩年は知人の家を転々とし、暮らしぶりは貧しかった。

「善を賞し、悪を罰する役目は、天であり神であり仏の仕事。天、神、仏、この三つが人間の道である。道はわれら物質の関与するところではない」

と金の精は言う。金は物質だから、人間の情とは関係がない、とも。

現代語訳をしていて一番面白かったのは、実はこの『貧福論』だった。

えんじょう・とう●1972年北海道生まれ。東北大学理学部物理学科卒業。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。2007年『オプ・ザ・ベースボール』で文学界新人賞受賞。10年『烏有此譚』で野間文芸新人賞、11年、早稲田大学坪内逍遙大賞奨励賞、12年『道化師の蝶』で芥川賞、14年『Self-Reference ENGINE』でフリップ・K・ディック記念賞特別賞をそれぞれ受賞。12年、早逝した伊藤計劃氏の未完の絶筆を引き継いだ『屍者の帝国』が話題に。近著に『シャッフル航法』『エビログ』『プロログ』など。

